

故人が生前使っていた物を整理する「遺品整理士」の資格を、堺市出身でアメリカに住む女性が取得した。自身も亡き母の残した物を処分することで気持ちに区切りをつけることができ、その経験を生かしたいという。

川上理々子さん(48)は3年前、堺市で一人暮らしをしていた母を亡くした。約20年前に国際結婚でアメリカに渡り、ユタ州で暮らしていた。

「その日」の朝も電話で母と話した。夜、再度かけると応答がない。心配になり、親類に頼んで様子を見に行ってみらしたが、すでに息はなかった。元気で持病などはなく、死因もわからなかった。

事実と向き合う勇気が出ず、2年半たった昨年夏、ようやく遺品整理を思い立った。市内の遺品整理会社「メモリーズ」に依頼。自身が見落としていた物の処分方法も一つ一つ聞いてくれる対応に好感を持った。

整理を終え、「生前は離れて暮らしていたけれど、亡くなってから母がかえって身近

思い出をつなぐ

堺出身・米在住の川上さん、「遺品整理士」に

になった。同様に母の物はなくなっただけで、思い出の中に残っている」と感じるようになった。

メモリーズ社長、横尾将臣さん(48)は、遺品のうち、まだ十分使える電化製品などをリサイクルに回すことを重視している。簡単に処分してしまうのではなく、物を残すことで、物が無くて不自由な生活をしている人の助けになれば、との思いからだ。

川上さんはこの姿勢に共感。米国では亡くなった人の家財一式全て売却に出され、活用されているケースもある。ネットなどで調べ、遺品整理士の資格があることを知った。昨年末に府内で初めて認定を受け、1月からは米国と行き来しながらメモリーズで研修を受けている。

「母の遺品整理をし、アメリカと日本の両方を知る自分の経験を役立て、亡くなった方が喜ぶような仕事ができるよう学んでいきたい」と川上さんは話す。

母が残した物はなくなったけれど、今も身近に感じる…



遺品整理の現場で研修中の川上理々子さん(右)とメモリーズ社長の横尾将臣さん(堺市堺区)

認定制度、昨年11月から

高齢者の独居死、子どもがいない、いても遠方で休みがとれない……。 「遺品整理士認定協会」(北海道千歳市)によると、遺族が形見分けや不用品の処分ができないケースが少なくないという。遺品整理会社につとめる若者が主人公の、さだまさし原作「アントキノイノチ」が映画化され、認知度もあがっているが、費用に関するトラブルなどもある。

協会ではこうしたトラブルの解消などを目指し、昨年11月から遺品整理士の資格認定制度を始めた。これまでに全国で約90人が取得しているという。問い合わせは同協会(0123・42・0528)。(角谷陽子)

「故人が喜ぶような仕事したい」